

「キッズアートプロジェクトしずおか」事業

未来を担う子どもたちに「本物の芸術に出会い、豊かな感性を磨く場」を提供する無料鑑賞事業

静岡県にあるミュージアムが連携し、県内の小学生なら誰でも美術館や博物館の展示会を無料で鑑賞できるというプロジェクトを進めている。貴重な作品や文物に直に触れることで、子どもたちの感性が磨かれることはもちろん、ややもすれば地域社会との接点が薄くなりがちなミュージアム自身の意識改革を促す取り組みとしても注目される。

児童たちが無料でミュージアムに入場できる「ミュージアム・パスポート」を発行・配布

文部科学省社会教育調査(2005年)によれば、日本には約5600館あまりの博物館や美術館などのミュージアムがあるという(動植物園や水族館なども含む)。それらのなかには多くの来客を集めているところもあるが、入館者の伸び悩みや固定化、地域社会との関係の希薄化などの課題を抱えているところも少なくない。こうした課題の解決策のひとつとして、静岡県内にあるミュージアムが連携して取り組んでいるのが、「キッズアートプロジェクトしずおか」である。

「これまで美術館や博物館は、収集や展示を主な役割

としてきたため、ともすればミュージアム側の論理で運営され、来館者や地域社会に対する視点が希薄でした。それが、敷居が高いという一般の方々のイメージにつながっていました。さまざまな分野で公共性や社会還元性が求められるなか、誰もがアートや文物などに触れ、それを楽しめる空間として、改めて地域社会におけるミュージアムの役割を見直す必要があるのではないか。そうした問題意識を背景に、次代を担う子どもたちが本物の芸術、文化、歴史などに触れる機会を提供するとともに、地域社会の活性化に貢献することを目的に始まったのが、このプロジェクトです」

Kids Art Project Shizuoka 実行委員会の事務局を担う駿府博物館学芸員の木南憲一さんは、そう話す。プロジェクトは、2011年12月に静岡市内の小学生約3万7000人に「ミュージアム・パスポート」を配布する事業で始まった。このパスポートを提示することで、子どもたちは市内にある6館のミュージアムに無料で入場できるというものだった。また、各ミュージアムのイベントやワークショップなどの情報を掲載した「ミュージアム通信」も市内88小学校の約1330学級に配布された。「教育機関や



2013年に配布されたミュージアム・パスポート。受付で押してもらったスタンプを集めると記念品がもらえる仕組み



静岡新聞に掲載されたプロジェクトの告知



作品を鑑賞しつつ、ワークシートに取り組む子どもたち

保護者からも好意的に受け止められ、親子連れで芸術作品や文化財などを鑑賞する小学生の姿が多く見られるようになりました」と、木南さん。さらに翌年度(2012年7月～2013年3月)には、参加するミュージアムも8館に増え、ワークショップ事業も加わった。

バス代サポートという新たな事業を加えて県内全域に拡大した参加館と対象児童

そして2013年度、プロジェクトは静岡県全域に拡大された。県内にあるミュージアム43館が参加し、県内の小学校549校(国立2校、公立512校、私立4校、特別支援学校31校)に通う約20万4000人の全児童にミュージアム・パスポートが配布された。さらに、バス代サポート事業も新たに加わった。

「これは子どもたちが住んでいる場所に関係なくミュージアムを訪れる機会を提供しようというもので、学校や教育委員会と連携し、ミュージアムまでの交通費を貸し切りバスの場合は7万円、公共交通機関利用の場合は4万円を上限にサポートするものです。プロジェクトの趣旨は素晴らしいが、地元で該当する施設がない、あるいは遠いという理由でパスポートを利用しにくいという声が、とくに山間、中山間地の学校から出ていました。そうした声に応え、学校教育の一環として鑑賞授業などに利用できるようにするため、このバス代サポート事業を始めました」と、木南さん。

担当者より



課題である活動予算が確保でき感謝しています。

Kids Art Project Shizuoka 実行委員会
駿府博物館 学芸員
木南憲一さん

県内全域にプロジェクトを拡大できたり、ホームページを開設できたりしたのも、AJOSCの助成があったおかげです。地域社会の結節点として、あるいは人間の創造性を豊かにする社会的装置として県内のミュージアムを発展させていきたい。事業を継続するためにも、今後も応援をお願いします。

また、2013年10月にはホームページを開設し、地元の静岡新聞に全面広告を出してプロジェクトの広報を行ったが、こうした一連の事業や活動にAJOSCの助成が活用された。「当初、のべ4万人の子どもたちの来館を予想していましたが、最終的には年度末で6万人に達すると思います」と話す木南さんだが、「県から予算をいただいて実施している事業ではないため、それをどうしっかり確保して継続性につなげていくか」と、今後の課題をあげた。

最後に、「子どもたちが真剣な眼差しで展示されている作品や遺物を眺め、笑顔で会場を出ていく姿ほど、私たちのエネルギーになるものはない。このプロジェクトは、私たちミュージアム側の意識改革にもつながるものなので、そうした子どもたちの笑顔を糧にがんばりたい」と、木南さんは意気込みを語った。ミュージアム・パスポートの現物を見ながら、つくづく静岡県の小学生たちがうらやましいと思った。



プロジェクトの一環として実施されたワークショップ事業